

地域に学ぶ場をつくり出す活動

飯島信吾
シーアンドシー
出版

出資金ふやしを支える健康づくり

どのような協同組合にとっても、組合員が自発性を発揮し、出資金ふやし、組合員ふやしなどをすすめていくことは、大きな課題である。そのポイントに学ぶ場づくりが必須の課題であるといえるが、その実践を紹介したい。

医療生協さいたまは、組合員 18 万 6,000 人、出資金総額は 46 億円、一人あたり平均出資額は 2 万 5,000 円になる。病院・診療所はセンター病院・1、拠点病院・3、診療所（歯科を含む）・11、老人保健施設・2、訪問看護ステーション・11、ヘルパーステーション・7、その他老人介護支援センターを擁している。2002 年には合併 10 周年を迎える。

出資金増は、4 課題（仲間ふやし、出資金ふやし、班づくり、班会開催）のなかでも年間とおして追求される重要課題であり、2001 年度には 5 億 4,000 万円を実現している。

通常総代会に提案された議案では、「実人員 3 割の組合員からの出資金増」がうたわれ、実際にも 25% 近い組合員から出資が行われている。

協同組合が市場経済のなかでその自主性・自発性を保持するためには、自己資本 = 出資金を高めることが必要である。これは「出資・管理・運営」という協同組合の三位一体原則からもいえる。

しかし、その出資者の実像は、病院で診療を受ける「利用者」だけではとらえきれない。注目されるべきは、病院・診療所の利用者ではない（診療圏の周辺）支部の組合員の厚い層が形成されていることである。たとえば M 支部は組合員 800 人、診療所に通うには交通の便が悪いエリアだが、毎年、自主目標を完遂している。「この地域に医療生協らしさをどう打ちだすかを考え、活動をしています」と支部長は語っている（M 支部では毎週 1 回、ストレッチ、ダンベル体操を市のコミュニティ・センターで開催して、参加を呼びかけている）。

総額 5 億の中の何割かは、「健康貯金、安心貯金」とよばれ、健康者や他の医療機関を利用している組合員の出資であり、「出資組合員」の願いを紡ぐ健康づくり、保健活動があることは、注目される。

出資は、地域にこのような健康づくり班が無数に生まれ、自主的な福祉・医療ネットワークが形成されている成果でもある。

学びながら人が育つ

「協同組合の真価は、人間の成長・発達にどこまで貢献できたかで判断できる」と断言すると違和感を覚える関係者もいると思うが、学びながら地域コミュニティーづくりに踏み出す多くの人材を生み出している医療生協の2つの学校づくり（保健大学、くらしの学校）は特筆すべき活動である。

保健大学は毎回3時間、6回の実技・講座が計画される。内容は「自分でできる健康チェック＝血圧、尿、糖など、健康づくりに適した運動のすすめ方、生活習慣とかかわっている病気、たべもの和生活習慣、薬と上手につきあう法」など医師や看護婦、栄養士、トレーナーなどの専門家の講義・実技がなされ、自分の健康、家族の健康、地域の人への健康づくりなどへ広がりをもたしている。

保健大学は毎年、多くの支部で開講され、多数の市民との出会いの場となり、医療生協活動に参加する契機を作り出している。

また「くらしの学校」は「社会保障・福祉の動向、町並みチェック、介護保険、市町村自治体などの動き」を学び、明るいまちづくりへの一歩を歩みだすための学ぶ場となっている。

この2つの学校を卒業して多くの組合員が「みずからの健康づくり、そして近くの市民の健康づくり、あかるいまちづくり」の活動をすすめる担い手に成長している。

春日部市で「いこいの家」(週3回の高齢者のたまり場、居場所づくり)を運営しているますみ会のTさん(80歳)は、「くらしの学校に参加して、若い方と並んで学んで、何かしなければいけないと思いました」「孤独な年寄りの話ができる場と思い、いこいの家をみんなでつくったんです」と埼玉県高齢者集会で語り、参加者に感動を与えている。

事業体内部ではなく、地域に学ぶ場をつくりだすこのような活動は、医療生協の中高年齢者・高齢者とわず、労協・高齢協の高齢者、青年、労働者にとっても「居場所の発見」であり、地域コミュニティーづくりに欠かせない課題である。